教育福祉委員会要求資料

令 和 4 年 9 月
教 育 委 員 会

１．クラスマネジメントシートについて

２．登校支援委員会について

## １　クラスマネジメントシートについて

### ⑴　概要

・　児童生徒を対象とした質問紙調査を実施し、回答を集計することにより、クラスや子ども一人一人の状況を把握し、学級経営を支援するための京都市独自のツール(平成２５年度から運用開始)。

・　児童生徒は、アンケートの問い（学級認知は２９項目、生活適応感は小学生用３３項目・中学生用３９項目で構成　例：クラスのみんなは、お互いによいところを認め合っている　等）に対して「全然あてはまらない」「あまりあてはまらない」「少しあてはまる」「よくあてはまる」の４段階で回答。

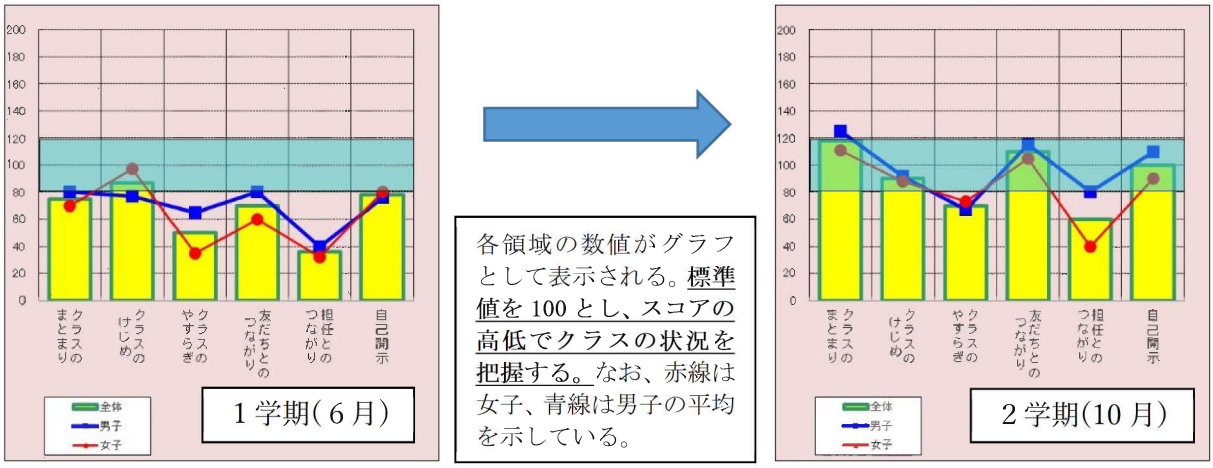
・　教職員が Microsoft Excel 上で回答を集計すると、①「学級認知」（子どもたちから見た学級の状況）と②「生活適応感」（子どもたちが、生活のどのような場面で楽しい又はつらい気持ちを抱いているか）について、複数の領域ごとに数値化されたシートが出力される。

### ⑵　対象

小学校４～６年生及び中学校１～３年生

### ⑶　活用事例について（Ａ中学校の学級認知の事例）

子どもから見た学級の状況をクラスのまとまり等の６領域から把握でき、担任等は、その結果から学級の特徴について見立てを行うことで、学級経営の改善に活かすことができる。




各領域の数値がグラフとして表示される。**標準値を 100 とし、スコアの高低でクラスの状況を把握する。**なお、赤線は女子、青線は男子の平均を示している。

取組（１学期）

・　年度当初から対教師反抗や学級ルールの乱れが見られたため、クラスマネジメントシートによる調査を実施した。

・　調査結果から、「クラスのやすらぎ」が低く、生徒間のトラブルやいじめリスク等が高い可能性があるクラスと考えられたため、いじめを絶対に許さないということを生徒に伝え、徹底的な指導を行った。

・　「担任とのつながり」の数値から、教員への信頼感が非常に低い状態であると考えられたため、日常的な生徒との関わりだけではなく、担任の思いを朝学活や終学活、学級通信等でも伝え、少しでも生徒・教員間の関係が良好なものとなるよう継続的な取組を行った。

取組（２学期）

- 対教師反抗や学級ルールの乱れも落ち着き、いじめリスクも低減した過ごしやすいクラスとなった。学級認知の結果を見ても、ほとんどの領域で数値が大幅に向上していることが確認できる。
- 女子の「担任とのつながり」の数値は依然、低いままであったが、とりわけ、対教師反抗の強い女子生徒に対して丁寧に関わるとともに、適宜、家庭訪問を行い、生徒・家庭と教師との信頼関係の構築に継続的に取り組んだ。

## 2　登校支援委員会について

### ⑴　目的

不登校や別室登校、登校しぶり等集団の中で学び育つことに困難を抱える児童生徒に対し、校長の指揮の下、校内で情報を共有し、背景要因を見立て、学校としての対応方針を定めることで、登校に向けて組織的な対応を行うことを目的として設置。

### ⑵　対象

小学校・中学校・小中学校・高等学校・総合支援学校

### ⑶　構成員

校長、教頭、生徒指導主任、教育相談主任、総合育成支援教育主任、学年主任、養護教諭、保健主事、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、その他関係教職員

### ⑷　登校支援の事例

①　小学校

| |
|---|
| 対象：３年生<br>経過：病気により２週間程度欠席したことをきっかけに２学期から登校が難しい状況になった。 |

- まず、児童の状況を確認するため、担任が家庭訪問を実施。児童への声掛けの中で、クラスメイトが帰宅した放課後なら登校できることを確認。登校支援委員会で報告し、放課後登校からはじめ、段階的に登校機会を増やすことを方針として取り組むとともに、月１回の委員会で経過を共有することを決めた。
- 放課後登校では、週４回程度、児童・保護者・担任で体育や図工の学習を進めた。登校への意欲を見ながら、１０月から保護者同席の下、午後から別室登校する体制に移行。並行してスクールカウンセラーによる保護者のカウンセリングも実施した。
- １１月頃から保護者が登校できないときは、保健室で過ごすこととしていたが、児童・保護者と相談しながら、徐々に原則、保健室登校で養護教諭が見守る体制に移行。段階的に登校への心理的負担を軽減することで、新年度のクラス替えを機に教室へ戻ることができた。

②　中学校

| |
|---|
| 対象：１年生<br>経過：５月末に孤独感を理由に登校できなくなった。 |

- 休日の部活動には意欲を持って参加できていることを部活動顧問から聞いた学年主任が、登校支援委員会で報告。委員会において、教室等での人間関係を注視しながら、部活動を通じて登校を継続し、段階的に教室復帰を目指すことを方針として取り組むとともに、２週間に１回の委員会で経過を共有することを決めた。
- 当初、当該生徒は、６限終了後職員室に登校し、担任と共に教室へ移動し、終学活に参加したのち部活動に参加することとしていたが、登校支援委員会による情報共有により、担任不在時も別の教員が対応することができ、当該生徒の安心につながった。
- その後、１０箇月にわたって段階的に教室に入る時間を早め、朝から登校できる日が増えてきた。